

長期国内視察報告書

～北海道・青森県・岩手県・宮城県～

沖縄経済同友会

2022年11月

主催：国際委員会

(共催：基地・安全保障委員会、観光委員会、
環境・エネルギー委員会)

目 次

I . 観察団名簿	1
II . 観察日程表《2022年11月9日（水）～11月13日（日）》	2
III . 観察総括	3
東川平 信雄 国際委員会委員長（株式会社おきぎん経済研究所 代表取締役社長）	
IV . 新千歳空港視察	10
桂原 耕一（株式会社 JTB 沖縄 取締役 副社長執行役員）	
V . 陸上自衛隊東千歳駐屯地および航空自衛隊千歳基地視察	14
宮里 洋介（野村證券株式会社 那覇支店長）	
VI . 青森県経済同友会との懇親会	18
崎間 由香子（株式会社琉球銀行 事務集中部部長）	
VII . 六ヶ所原燃P Rセンターおよび原子燃料サイクル施設 観察	20
久貝 博康（沖縄プラント工業株式会社 代表取締役社長）	
VIII . 海上自衛隊大湊基地および航空自衛隊三沢基地 観察	25
上運天 清（株式会社りゅうせきフロントライン 代表取締役社長）	
IX . 星野リゾート青森屋 観察	29
前田 貴子（株式会社ゆがふホールディングス 代表取締役社長）	
X . 毛越寺および中尊寺 観察	34
仲宗根 齊（株式会社沖電工 代表取締役社長）	
XI . 青森県、宮城県観光地 観察	37
比嘉 為俊（沖縄経済同友会 事務局研究員）	

※ 観察報告に掲載されているすべての集合写真については、撮影時のみマスクを外し、速やかに写真撮影を行っております。

I. 観察団名簿

(役職は観察時点 2022年11月)

No.	当会役職	氏 名	会 社 名	役 職
1	代表幹事	渕辺 美紀	株式会社ジェイシーシー	代表取締役会長
2	代表幹事	川上 康	株式会社琉球銀行	代表取締役頭取
3	副代表幹事	當銘 春夫	株式会社りゅうせき	代表取締役社長
4	国際委員長	東川平 信雄	株式会社おきぎん経済研究所	代表取締役社長
5	常任幹事	前田 貴子	株式会社ゆがふホールディングス	代表取締役社長
6	常任幹事	久貝 博康	沖縄プラント工業株式会社	代表取締役社長
7	常任幹事	小林 文彦	川崎重工業株式会社	沖縄支社長
8	常任幹事	上運天 清	株式会社りゅうせきフロントライン	代表取締役社長
9	常任幹事	仲宗根 齊	株式会社沖電工	代表取締役社長
10	常任幹事	仲田 一郎	ヤシマ工業株式会社	代表取締役
11	会員	桂原 耕一	株式会社JTB沖縄	取締役兼副社長執行役員
12	会員	宮里 洋介	野村證券株式会社	那覇支店長
13	準会員	崎間 由香子	株式会社琉球銀行	事務集中部部長
14	会員企業	座間味 進	沖縄電力株式会社	総務部秘書グループ係長
15	事務局	竹越 康一郎	沖縄経済同友会	事務局長
16	事務局	上地 龍太	沖縄経済同友会	事務局次長
17	事務局	比嘉 為俊	沖縄経済同友会	事務局研究員
18	添乗員	阿形 将之	株式会社JTB沖縄	マネージャー
19	添乗員	井川 伸夫	株式会社JTB沖縄	担当マネージャー

II. 視察日程表 2022年11月9日(水)~13日(日)

日次	月日曜	行程	食事
1 11/9 (水)		那覇空港 JAL 902 10:10 <135> 羽田空港 JAL 517 ++++++ 12:25 [65] 13:30 <90> 新千歳空港視察 ===== 15:00 [120] 17:00 <60> 札幌 (泊) 18:30～センチュリーロイヤルホテルにて第7師団様との交流会 18:00 18:30 ご宿泊：センチュリーロイヤルホテル	朝：- 昼：- 夕：○
2 11/10 (木)		センチュリーロイヤルホテル ===== 東千歳駐屯地視察 ===== 千歳基地視察 ===== 07:30 <55> 08:25 [60] 09:25 <20> 09:45 [40] 10:25 <10> NH1898 新千歳空港 +++++ 青森空港 ===== 江戸前秀寿司 ===== 10:35 [60] 11:35 <50> 12:25 [30] 12:55 <20> 13:15 [60] 14:15 <65> 弘前城見学 ===== 青森 (泊) 18:00～ホテル青森にて青森経済同友会様の交流会 15:20 [40] 16:00 <60> 17:00 18:00 ご宿泊：ホテル青森	朝：○ 昼：○ 夕：○
3 11/11 (金)		ホテル青森 ===== 六ヶ所原燃 PRセンター及び日本原熱工場視察 ===== むつグランドホテル（昼食）===== 07:40 <80> 09:00 [90] 10:30 <60> 11:30 [70] 12:40 <20> 大湊基地視察 ===== 三沢（泊）星野リゾート 青森屋ご到着後、南部曲屋にてみちのく祭りやを お食事までの間、温泉をご利用ください 13:00 [120] 15:00 <130> 17:10 19:30 21:00 ご宿泊：星野リゾート 青森屋	朝：○ 昼：○ 夕：○
4 11/12 (土)		星野リゾート 青森屋 ===== 三沢基地視察 ===== 八戸駅（はやぶさ18号）===== 08:00 <10> 08:10 [120] 10:10 <40> 11:07 [36] 11:43 <100> (盛岡乗換12:08) 一ノ関駅 ===== 戒元レストラン 世越の一 ===== 毛越寺 ===== 12:47 [20] 13:07 <3> 13:10 [80] 14:30 <20> 14:50 [60] 15:50 <10> 中尊寺（紅葉銀河を鑑賞） ===== 仙台（泊） ===== ウエスティンホテル仙台にてご夕食 16:00 [120] 18:00 <80> 19:20 19:30 ご宿泊：ウェスティンホテル仙台	朝：○ 昼：○ 夕：○
5 11/13 (日)		ウェスティンホテル仙台 ===== ニッカウヰスキー株式会社 ===== 仙台空港 ===== ANA 1863 08:15 <45> 09:00 [60] 10:00 <70> 11:10 [50] 12:00 <200> 宮城峠蒸溜所 那覇空港 15:20	朝：○ 昼：- 夕：-

III. 観察総括

東川平 信雄（国際委員長：株式会社おきぎん経済研究所 代表取締役社長）

私たち沖縄経済同友会渕辺美紀、川上康両代表幹事を含む観察団 17 名は、2022 年 11 月 9 日から 2022 年 11 月 13 日までの 4 泊 5 日間の日程で、国内（北海道・青森県・岩手県・宮城県）の各事情を観察しました。国際委員会は、これまで海外ビジネスの可能性及び海外先進地事例の調査研究の一環として海外観察にてビジネスの展開及び沖縄経済発展への可能性を観察・調査を行って参りましたが、海外のコロナ禍における入国制限措置を鑑み、国内観察に切り替え国際委員会、基地・安全保障委員会、観光委員会、環境・エネルギー委員会の共催観察として開催いたしました。

主な観察先として、(1) 北海道では、新千歳空港及び陸上自衛隊東千歳駐屯地第 7 師団の観察、航空自衛隊千歳基地の政府専用機観察、(2) 青森県では、原子燃料サイクルの現状と運用についての知見を深めるため六ヶ所原燃 PR センター観察及び自由で開かれたインド・太平洋構想（FOIP）を中心に経済及び安全保障の観点から沖縄が持つ地政学的な重要性について理解を深めるため海上自衛隊大湊基地並びに航空自衛隊三沢基地観察、(3) 岩手県では、世界遺産に登録された平泉一帯に含まれている中尊寺、毛越寺を観察し、平泉の歴史、まちづくりについて学び、(4) 岩手県では、ニッカウヰスキー株式会仙台工場第二の蒸留所である宮城峡蒸留所見学など、国内（北海道・青森県・岩手県・宮城県）の観察・調査を行いました。

観察初日は、那覇空港発（羽田空港経由）新千歳空港着の「所要時間：3 時間 45 分」の移動となりました。新千歳空港到着後、ブリーフィング会場へ移動し北海道エアポート株式会社新千歳空港事業所リテール部の担当の方から新千歳空港の概要及びターミナルビル商業施設概要の説明を受けました。

新千歳空港は、事業コンセプトのもと年間航空旅客数約 2,281 万人（2019 年度）、国内外就航都市 41 都市（2022 年 5 月現在）、年間発着回数約 15.5 万回（2019 年度）、面積 7.26km²（東京ドーム 155 棟分、店舗数（国内線：158 店舗、連絡施設：6 店舗、国際線：24 店舗 合計：188 店舗）からなる「お土産だけじゃない！楽しめる空港」として多様な過ごし方ができる空港を目指し取り組んでいました。



その後、空港内の商業施設を見学しました。特徴としてのエンターテイメントは、空港内に日本初のエアポートシネマ「ソラシネマちとせ」や、「ハローキティ ハッピーフライト」、「ドラえもんわくわくスカイパーク」などがあり、大人だけでなくお子様も一緒に楽しむことができ、また、温泉やマッサージ施設もあり、旅で疲れた体を癒すことができる施設が整っていました。

新千歳空港の新たな空港機能の充実・創造を掲げた空港運営は、世界最高水準の空港を目指す那覇空港としても是非、参考にしたい取り組みでした。



視察2日目は、北海道千歳市に所在し、第7師団司令部等が駐屯する陸上自衛隊の駐屯地である東千歳駐屯地を視察・意見交換を行いました。

駐屯地内のブリーフィングで第7師団の概要説明を受け戦車等の装備品展示を見学し 90式戦車の体験搭乗をすることができました。貴重な経験をさせていただき参加者全員が興奮状態での試乗でした。

90式戦車は、61式戦車、74式戦車に続いて戦後3番目に開発された陸上自衛隊の第3世代戦車で砲弾の装填も自動装填装置の採用で手動から自動になり装填手が搭乗する必要がなく安定した連続射撃が可能になった戦車であると説明を受けました。

その後、移動し日本の北端を担当する第2航空団が置かれているロシアと対峙する最前線の基地である航空自衛隊千歳基地を視察しました。今回は、千歳基地の配属部隊である航空自衛隊航空支援集団隸下の特別航空輸送隊を視察しました。特別航空輸送隊は、隸下の第701飛行隊により皇室及び政府の要人輸送等を行う日本国政府専用機2機(ボーイング777-300ER)の運用及び整備を行う特別任務の部隊です。

政府専用機は、国賓等の輸送のほか、必要に応じ、緊急時における在外邦人等の輸送、国際緊急援助活動や国際平和協力業務等実施のための輸送にも用いられており我が国の国際貢献の一翼を担っている専用機でした。

今回の視察は、基地内滑走路間近で政府専用機の見学や運用、整備に関する意見交換を行うことができました。



(陸上自衛隊 東千歳駐屯地にて)



(航空自衛隊 千歳基地にて)

千歳基地視察後、次の視察地である青森県へ飛行機（新千歳空港発～青森空港着）にて移動しました。昼食後、史跡 弘前城を見学しました。弘前公園の中にある弘前城は、津軽統一を成し遂げた津軽為信によって慶長 8 年（1603 年）に計画され、二代目信枚が慶長 15 年（1610 年）に着手し、翌 16 年に完成しました。以後、弘前城は津軽氏の居城として、廃藩に至るまでの 260 年間、津軽藩政の中心地でした。

現存する日本最北端の天守で、国の重要文化財にも指定されており園内の門、橋、濠は歴史的な情緒に溢れています。また、色鮮やかな紅葉に包まれた風景には、奥ゆかし弘前の秋を感じることができました。

その後、青森市内へ移動し、「会員相互の同志的結合および協力により産業経済界の力の結集を図り、もって青森県の産業経済の開発を通じて日本経済の発展に寄与すること」を目的に活動している青森県経済同友会と懇親会を開催しました。コロナ禍における地域社会経済活動の状況や将来の展望などについて多くの意見交換を行い相互の親睦を深め有意義な懇親会となりました。



視察 3 日目は、青森県下北半島六ヶ所村にある「エネルギーの長期安定供給を願って、環（サイクル）の完結を目指す」日本原燃株式会社の原子燃料サイクル施設を視察しました。「原子燃料サイクル」とは、使用済燃料を再処理し、ウラン資源を再び燃料として再利用す

る一連の流れのことです。当社は、原子燃料サイクルの確立を目指して、「ウラン濃縮工場」、「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」、「低レベル放射性廃棄物埋設センター」の3施設を創業するとともに、使用済燃料をリサイクルするための「再処理工場」および「MOX燃料工場（2024年竣工）」の操業に向けて取り組んでいました。事前説明を受けた後、原子燃料サイクル施設を模型や映像、パネルで分かりやすく案内されている六ヶ所原燃PRセンターを見学、バスにて原子燃料サイクル関連施設を視察しました。

今回の視察は、安全を最優先にエネルギーの長期安定供給を目指す取り組みである原子燃料サイクルに対する知見を改めて深めることができました。

その後、青森県むつ市へ移動し、海上自衛隊大湊基地視察前に海上自衛隊大湊地方総監の泉 博之海将、中村 敏弘海将補、他2名と同席にて懇親昼食会を開きました。

むつ市では、海上自衛隊大湊基地所属の艦艇等で提供されている海自カレーを市内飲食店等で提供する事業を2017年から開始しており6部隊のカレーをむつ市内で味わうことができるそうです。今回は、特別に空自空上げ付き2種類の海自カレーを頂きました。



昼食後、海上自衛隊大湊基地を訪問、ブリーフィングを受けた後、護衛艦「すずなみ」へ乗船しました。護衛艦「すずなみ」は、2006年2月に就役し、たかなみ型護衛艦の5番艦で艦名は「澄んで青い波」に由来しており基準排水量4,650トン、全長151m、最大幅17.4m、深さ10.9m、最大速力30ノット、乗員175名、SH-60J/K哨戒ヘリコプター搭載型護衛艦で第3護衛隊群第7護衛隊に所属し大湊を定係港としています。

艦内見学では、乗組員より詳細な説明を受けることで自衛隊の国の平和と独立を守るという使命の下、領土・領海・領空を守る活動や災害時の搜索・救助、など各種活動に取り組んでいる現場に触れることができ改めて自衛隊の存在価値を考えさせられました。

大湊基地視察終了後、観光事情の一環として次の視察先である星野リゾート青森屋へ移動しました。青森の文化・原風景を体感する宿として青森四大祭りのショーや郷土料理を堪能でき青森の魅力満載の宿でした。青森屋からは、これからホテル経営の在り方また、地元の魅力をいかに取り込むか工夫と発見を意識させられた視察でした。また、沖縄観光の新たな魅力づくりを考える良い機会となりました。



視察 4 日目は、航空自衛隊唯一の日米共同使用航空作戦基地であり航空自衛隊に属する14 個部隊が所在、航空機は、自衛隊の F-35A 戦闘機、米軍の F-16 戦闘機が常駐し北部防衛の要石であり重要な役割を持つ三沢基地を視察しました。

視察は、基地内にてブリーフィングを受け、その後、F-35A 戦闘機を見学しました。F35A は、高いステルス性能、格段に進化したシステムを有した最新鋭の主力戦闘機です。格納庫で戦闘機を目の前にした詳細な説明は、航空自衛隊が、我が国の防衛、地域の安定に欠かせない重要な役割を担っている多大な貢献を改めて認識しました。

沖縄県における自衛隊と米軍の役割と今後の先進的な取り組みについて考える良い機会となりました。

その後、八戸駅から「はやぶさ 18 号」で盛岡乗り換え「やまびこ」にて一ノ関駅到着、昼食を終えて毛越寺へ移動しました。



毛越寺到着、本堂で住職から毛越寺の由来「白鹿伝説：寺伝によると嘉祥 3 年（850）慈覚大師が東北巡遊のおり、この地にさしかかると、一面霧に覆われ、一步も前に進めなくなりました。ふと足元を見ると、地面に点々と白鹿の毛が落ちておりました。大師は不思議に思いその毛をたどると、前方に白鹿がうずくまっておりました。大師が近づくと、白鹿は姿をかき消し、やがてどこからともなく、一人の白髪の老人が現われ、この地に堂宇を建立し

て靈場にせよと告げました。大師は、この老人こそ薬師如来の化身と感じ、一字の堂を建立し、嘉祥寺と号しました。これが毛越寺の起りとされます。」や歴史等の説明を受けました。その後、境内、大泉が池を中心に地上に仏の世界を表現した浄土庭園を散策しました。その途中で周囲の山や自然を借景として巧みに取り入れた山水を池に注ぐ平安時代の貴重な遺構である「遣水（やりみず）」と呼ばれる全長80メートルの川の姿を表現している曲がりくねった水路が目につきました。そこは、毎年5月に遣水を舞台に平安装束姿で和歌を詠む行事「曲水の宴（ごくすいのえん）」が行われているとのことで、短い時間でしたが壮大華麗な浄土思想に触ることができました。

毛越寺の観察を終え、次の観察先である中尊寺へ移動しました。中尊寺は嘉祥3年（850）、比叡山の高僧慈覚大師円仁によって開山され12世紀初め奥州藤原氏初代清衡公が前九年・後三年の合戦で亡くなった命を平等に供養し、仏国土を建設するため大伽藍を造営したとされる寺院です。その中でも中尊寺創建当初の姿を今に伝える1124年（天治元年）、奥州藤原氏初代清衡公によって上棟された金色堂は、内外に金箔の押された「皆金色」と称される金色堂の内陣部分は、随所に夜光貝を用いた螺鈿細工や象牙や宝石によって飾られており、経典に説かれた「皆金色」の極楽浄土を表現していました。夕暮れに古い栄華に思いを馳せる時間を過ごすことができました。中尊寺の歴史に触れた後、帰りは、風情ある老杉が連なる参道の月見坂を歩いたと思いますが、日も暮れて足元もおぼつかない中で坂道800mの距離は、風情を感じる余裕はありませんでした。



視察5日目は、視察最終日、宮城県仙台市青葉区ニッカ1番地にある自然の景観をそのまま活かした緑豊かな峡谷で世界でも数少ないモルトウイスキーとグレンウイスキーを製造している赤レンガの建物群ニッカウヰスキー仙台工場宮城峡蒸留所を見学しました。受付後、ビジターセンターで映像やパネル、展示物からウイスキーの製造工程やニッカの歴史などを学ぶことができ、貯蔵庫の見学では、樽の種類や熟成によるウイスキーの色や香味の変化を見て長年月を経て熟成されたウイスキーの魅力を感じることができました。テイスティングバーでは、清流に囲まれた自然豊かな場所で華やかで軽やか、ほんのり甘やかな宮城峡モルトや男性的な余市モルトなど各種のウイスキーを片手に、華やかな香

りとニッカウヰスキーの歴史を感じながら古酒のまろやかさと風味のある沖縄泡盛の歴史への思いと重ね合わせての試飲でした。

視察終了後、宮城県仙台空港発、那覇空港着をもって全ての日程を無事終了することができました。今回の沖縄経済同友会長期国内視察(北海道・青森県・岩手県・宮城県)は、国際委員会、基地・安全保障委員会、観光委員会、環境・エネルギー委員会の共催にての開催となり例年と一味違う内容で充実した視察となりました

今回多くの都県を跨ぐ長旅の視察となりましたが、全ての視察先での学びは実り多く、大変有意義な視察を行うことができました。

最後に長期国内視察(北海道・青森県・岩手県・宮城県)にあたって、ご協力いただきました各視察先の皆様並びご参加くださいました皆様へ深く感謝を申し上げまして全体総括とさせていただきます。



IV. 新千歳空港 視察

【報告者：桂原 耕一（株式会社 JTB 沖縄 取締役 副社長執行役員】

現在日本では 11 の空港が民営化されている。新千歳空港についても 2020 年 6 月に運営が北海道エアーポート株式会社に移管された。今回の視察については、空港運営会社である北海道エアーポート株式会社様にご協力いただき、新千歳空港商業施設の概要や事業コンセプトの説明を受けたあと商業施設を見学した。

【新千歳空港 商業施設概要（北海道エアーポート会社様からの説明）】

●新千歳空港の概要

新千歳空港の 2019 年度の年間旅客数は約 2,281 万人（那覇 2,197 万人）、年間発着回数約 15.5 万回、面積は 7.26k m²（東京ドーム 155 棟分）であり日本有数の空港である。

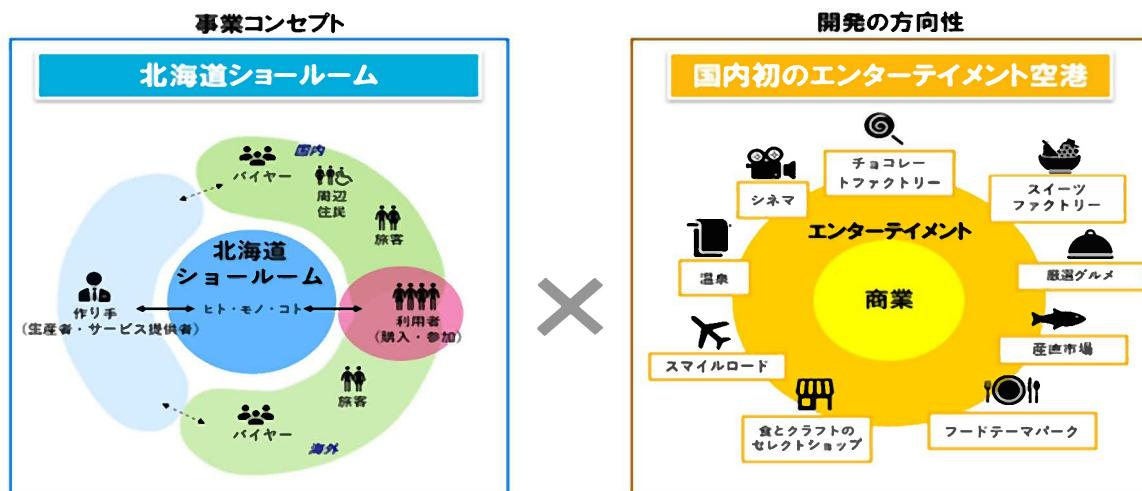
●新千歳商業施設概要

⇒店舗概要

空港内の店舗数は国内線 158 店舗、国際線 24 店舗、連絡施設 6 店舗の合計 188 店舗、ショッピングからグルメ、エンターテイメント施設などバラエティ富み、航空機の利用客のみならず地域住民も楽しめる場所を目指している。

⇒事業コンセプト

『新たな空港機能の充実』『より高度な商業空間の創造』『新たな顧客の需要の創造』



⇒目的

『魅力の拡大による、顧客満足と収益の最大化』

『地域住民と空港利用者の交流拠点となる空港核都市づくり』

『旅客数増減に左右されにくいコンセッション事業の確立』

⇒MD コンセプトごとに整理されたエリア



・ショッピング・ワールド（国内線 2 階）

『「北海道」を感じていただける売り場を目指す』

『「北海道らしさ」をキーワードに更なる拡大強化を図る』



・グルメ・ワールド（国内線 3 階）

『「北海道ならでは」を感じていただける店舗展開』

『道内の美味もちりばめられた飲食ゾーンの構築を目指す』



・オアシス・パーク（国内線 4 階）

『地域交流型のエンターテイメント施設を目指す』

『多様で豊かな時間の過ごし方を提供する』



・スマイル・ロード（3 階連絡通路）

『地域交流型のエンターテイメント施設を目指す』

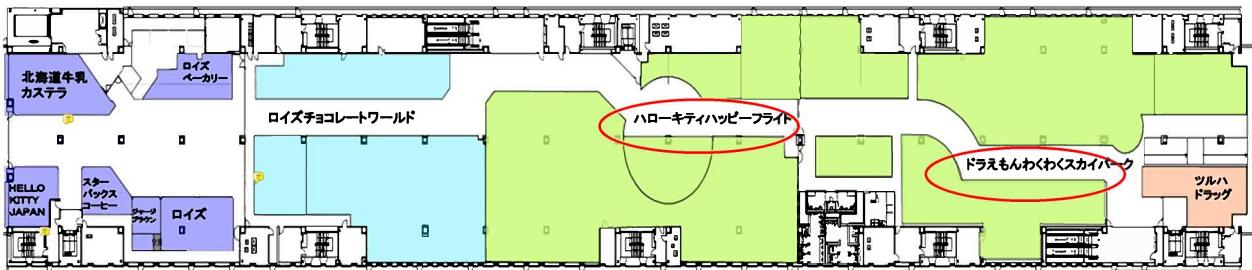
『多様で豊かな時間の過ごし方を提供する』



※新千歳空港はテーマパークを備えた商業施設にすることで、観光客（訪日インバウンド含む）だけでなく地域住民にも利用していただける施設を目指している。駐車場最大収容台数は 4,520 台であり、空港内のエンターテイメント施設利用者には駐車料金を 3 時間無料とし地域住民の利用促進を図っている。個人・ファミリーに加え学校の校外学習などもターゲットとしている。

【商業施設見学】

●スマイルロード（3階連絡通路）



⇒見学施設

・ハローキティ ハッピーフライト

2017年OPEN、総面積1,284 m²、サンリオキャラクターをテーマとした体験型テーマゾーン

・ドラえもん わくわくスカイパーク

2011年OPEN、総面積1,375 m²、ドラえもんをテーマとした体験型テーマゾーン

※スマイルロードは国際線と国内線を結ぶ通路に設置されている。我々が視察した時にはコロナの影響で多くの国際線が運休であったためエリア内は閑散としていた。しかしながら国際線が復便すれば、訪日インバウンドを含め多くのお客様で賑わうことが期待できる。ドラえもんやハローキティは世界的に人気があるキャラクターであり、体験型テーマゾーンの内容も充実している。また、地域住民の囲込みのため年間パスポートを導入したり、各種イベントにもキャラクターが出演する（ドラえもんは不可）企画を行うなど様々な仕掛けが施されている。

【視察を終えて（個人的感想）】

年間旅客数、年間発着回数、訪日インバウンドの利用数など空港の面積を除いて新千歳空港と那覇空港はほぼ同規模の空港である。「札幌から約50kmの新千歳空港と市街地に隣接している那覇空港」、「雪のため子供たちの遊び場が制限される千歳住民とされない那覇市民」、これらを考慮すると、那覇空港が必ずしも新千歳空港と同じ戦略である必要はないと思われる。

しかしながら、訪日インバウンドを含む、ほとんどの沖縄入域者が利用する那覇空港

の利活用の方法を検討していく上では新千歳空港の取組みは大いに参考になる。

- ・沖縄県産品の販売やプロモーションでの活用
- ・観光客のタッチポイントの更なる充実
- ・ビジネスマンの利便性向上
- ・琉球の文化伝統の情報発信など

沖縄は言うまでもなく日本有数の観光地であり、今後、沖縄を世界に通用する観光地に育てていくためにも、玄関口である那覇空港の役割は大きい。

V. 陸上自衛隊東千歳駐屯地および航空自衛隊千歳基地 観察

【報告者：宮里 洋介（野村證券株式会社 那覇支店長）】

東千歳駐屯地 観察報告

観察2日目、現在ロシアによるウクライナ侵攻による影響と中国による台湾有事の可能性があり、わが国日本も対岸の火事ではなくなりつつある中、とりわけ、沖縄においてはそのリスクが高まりつつある。現在の自衛隊の陸・海・空における安全保障の現状や我が国の防衛の最前線の状況などの知見を深めることを目的に、東千歳駐屯地・千歳基地を観察訪問し意見交換を行った。

観察訪問に際し、東千歳駐屯地 第七師団長の中村裕亮陸将、千歳基地 航空自衛隊第二航空団司令兼千歳基地司令 柳享範空将補には前日の意見交換会へのご参加、また当日もご出席頂いた。

はじめに東千歳駐屯地 第七師団の役割も含めた説明があった。概要を以下に示す。



第七師団

概要

陸上自衛隊で唯一の機甲師団であり、3個戦車連隊を中心とし、約200両（自衛隊保有数の約1/3）の戦車が集中配備されている。戦車連隊を複数有する師団は、第7師団のみであり、戦車の大量装備のみならず、特科の装備する火砲の完全自走化もなされている。重戦力による機動打撃を担当しており、機動運用部隊として、必要に応じ他地域への展開も行う。また、普通科部隊である第11普通科連隊も普通科6個中隊基幹と部隊規模が大きく、重迫撃砲中隊も含めて、こちらも完全機械化されている。このほか、戦車配備の偵察隊や装甲車配備の通信隊など、他の師旅団と比較し機械化が図られている。

任務

師団は『最強の抑止力・対処力』として我が国周辺の脅威に対して北海道の防衛のみならず、全国へ機動展開して、侵攻した敵部隊を撃破するとともに、大規模災害へ対応することを任務とする。

特性

1. 機動運用部隊・戦略的予備として、有事の際は道内はもとより全国へ機動展開して作戦を行う。
2. 陸上自衛隊唯一の機甲師団として戦車を主体とした重戦力を保有する。
3. 師団の担任する地域には、苫小牧港・新千歳空港という交通の要衝があり師団隸下部隊のほとんどが、師団司令部から約20キロの範囲に駐屯している。
4. 地元自治体・地域住民の方々のご理解・ご協力のもと、近傍に広大な演習場を有し恵まれた訓練環境にある。

東千歳駐屯地の視察を終えて

現在の任務も含めて、活動内容に関しては国家機密の観点からも内容に関しては詳細には記すことができないが、印象的な説明として以下を感想とする。軍備・防衛についてもデジタル化が世界的に加速している流れにはあるが、今回のロシアによるウクライナ侵攻を例に挙げると、地上戦とりわけ戦車部隊の重要性がより増している。地上戦というのは一昔前の印象を持つてしまうが、現実は違い陸上における戦力の差が明暗を分けている印象すらあるという自衛官のコメントがとても印象に残っている。

基地に配備されている7種類の戦車の展示及び実演を見学し、また、90式戦車には実際に乗車する機会に恵まれた。自衛官2名と弊会1名の3名乗車であり、約2~3分だったが、非常に貴重な経験をさせて頂いた。

・千歳基地 視察報告

千歳基地

概要

北海道千歳市にある航空自衛隊の基地で、民間機も含めて航空管制は航空自衛隊が一元的に行なっている。日本の北端を担当する第2航空団が置かれており、航空自衛隊にとっては、かつてのソビエト連邦、継承国ロシアと対峙する最前線の基地である。



訪問先部隊 航空自衛隊 特別航空輸送隊

概要

特別航空輸送隊は航空支援集団に属しており、隊本部、第701飛行隊及び整備隊の3つで構成されている。任務としては、政府専用機による国賓等の輸送及び空中輸送員の課程教育を行うほか、必要に応じ国際平和協力業務（PKO）及び緊急時における在外邦人等の輸送や国際緊急援助活動も実施している。

- ・現在運用されている2代目となる機種は「ボーイング777-300ER」で、平成31（2019）年4月より運用されている。初代のボーイング747と比べて燃費が向上し、最大航続距離が長くなるなど、より環境に配慮した機体となっている。
- ・実際に運航を担当しているのは航空自衛隊千歳基地に所在する特別航空輸送隊である。つまり、パイロットをはじめ、総理などの搭乗者への機内サービスを担当する客室乗務員も含め、スタッフはすべて航空自衛官が務めている。また、運航する際には、2機の政府専用機が共に飛び、整備担当の航空自衛官も同行するなど万全の態勢を敷いています。
- ・特別仕様の機内には、総理が乗り込むスペースに加え、事務作業室、会議室などのほか、同行する記者等のための座席も用意されている。
- ・現在、政府専用機で101の国と地域に飛行し、任務を遂行した。（写真：上記右）

東千歳駐屯地・千歳基地の視察訪問を終えて

第七師団の中村陸将、第二航空団司令の柳空将補のお二方が共通して仰っていたことは、わが国の防衛の取り巻く環境は年々緊張感が高まっていること。その中でわが国・国民を守るために自衛官一人一人が真摯に防衛と向き合い日夜訓練に励んでいること、また、あらゆるリスクに備えて常に準備を行っていることをぜひ知ってほしいとのことだった。

今年、ロシアによるウクライナ侵攻に伴い日本における「安全保障」とは何かを改めて考える状況にあると言える。安全保障とは「軍事」だけではなく、いかにして「国を守る」かにつきるということを考えさせられる視察であった。引き続き、沖縄経済界と自衛隊関係者との意見交換を継続して行い、相互理解を深めていければ幸いである。コロナ禍の中、基地見学や弊会との意見交換を受け入れて頂いた皆様には、この場を借りて御礼申し上げる。

VI. 青森県経済同友会との懇親会

【報告者：崎間 由香子（株式会社琉球銀行 事務集中部部長）】

視察2日目に、青森県経済同友会との交流を目的に懇親会を開催した。青森県は第一次産業が盛んで、特に青森の特産物リンゴに力を入れている、また青森ねぶた祭りを起点とした観光を中心とした産業が盛んであるとの事であった。コロナ禍の中では、製造業が回復の兆しが見えてきたが、輸入資材の高騰でまた苦しんでいるというレポートが色々な所から上がっているとの事であった。懇親会ではアフターコロナを見据えた地域の経済、社会活性化のあり方の意見交換等を行った。各地域がそれぞれの特色を生かして、魅力ある地域にしていく為、様々なアイディアを出し、地域を盛り上げていく事を協力し続けて行こうとなった。今回の懇親会で双方の理解が深まる良い機会となった。懇親会を通して、今後も有効な関係を築けたことは大きな成果となった。



1. 青森経済同友会 代表幹事 佐藤 健一さま歓迎挨拶

沖縄経済同友会の皆様と交流会と意見交換の機会をいただき、心より感謝申し上げます。コロナ禍は青森県の経済に大変深刻な打撃を与え、全く回復のめどが立っていない状況です。さらに、私共の奈良秀則代表が急逝いたしました。

奈良代表と沖縄経済同友会の皆様とは非常に仲良くさせていただき、私も奈良代表と一緒に沖縄にお伺いし石垣島、宮古島を拝見し宮古島では、海に落ちたりして大変いい思い出です。

奈良代表は亡くなりましたが、何とかほかの同友会のメンバーと力を合わせ青森県の経済の元気を回復していきたい。その過程で沖縄経済同友会様のお知恵を拝借いただければと思います。

沖縄は観光客がもどり、みんな気持ちが明るくなっていると川上代表幹事からのお話がありました。経済にはこれが非常に大事な要素です。そういった沖縄のお話を聞かせ願いながら、参考にさせて頂きたい。また、渕辺代表の元気をいただき、冬に向けて頑張りたいと思います。



2. 沖縄経済同友会 代表幹事 渕辺 美紀 訪問挨拶

お忙しい中沖縄経済同友会を受け入れていただき、ありがとうございます。

最初の青森とのご縁は2017年8月。当時の代表幹事の杉本さんに、ねぶた祭りに来たことが無ければいらっしゃいませんかと声をかけてもらったのが最初です。ねぶたの時期に伺い、はねとの格好をさせてもらい、最後には舟を見送る所までさせていただき、手厚くもてなしていただきました。

また、2018年には沖縄にお越しいただき、その時も大変楽しく交流させていただきました。

2019年2月には青森県に伺い、吹雪ツアーを体験させていただきました。2019年2月も奈良さんに大変お世話になりました。八甲田山ロープウェイで強風と雪で前も見えないほどの経験をさせていただきました。すべてが懐かしい思い出であり、そこに奈良さんがいてくれました。

奈良さんの思いを引継ぎお互いの親交を深めて、これからも交流し続け青森と沖縄の観光を盛り上げることが大切だと思います。

今回は受け入れていただきありがとうございます。

今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。



VII. 六ヶ所原燃PRセンターおよび原子燃料サイクル施設 観察

【報告者：久貝 博康（沖縄プラント工業株式会社 代表取締役社長）】

観察3日目、原子力発電所での使用済燃料を再処理して新たな燃料として再利用する原子燃料サイクルに関する知見を深める事を目的に、青森県下北半島六ヶ所村にある六ヶ所原燃PRセンターおよび再処理工場等原子燃料サイクル施設の観察を行った。

はじめに、日本原燃（株）の武藤様（理事・地域広報本部長）よりご挨拶を頂戴した後、山田様（フェロー技術広報担当）より施設の概要を説明頂いた。その後、PR館の観察、原子燃料サイクル施設をバスの車窓から観察を行った。

1、原子燃料サイクル施設について

① 位置図



② 事業運営会社：日本原燃株式会社

- ・設立：日本原燃サービス(1980年設立)と日本原燃産業(1985年設立)が1992年に合併し発足。
- ・資本金： 4,000億円
- ・売上高： 1,860億円(2021年)
- ・総資産： 2兆9,625億円(2021年度)
- ・株主： 84社(2022年3月)
9電力会社と日本原子力発電が主要な株主(全体の91%)
- ・従業員： 3,142名(2022年4月)

③ 地域との関係

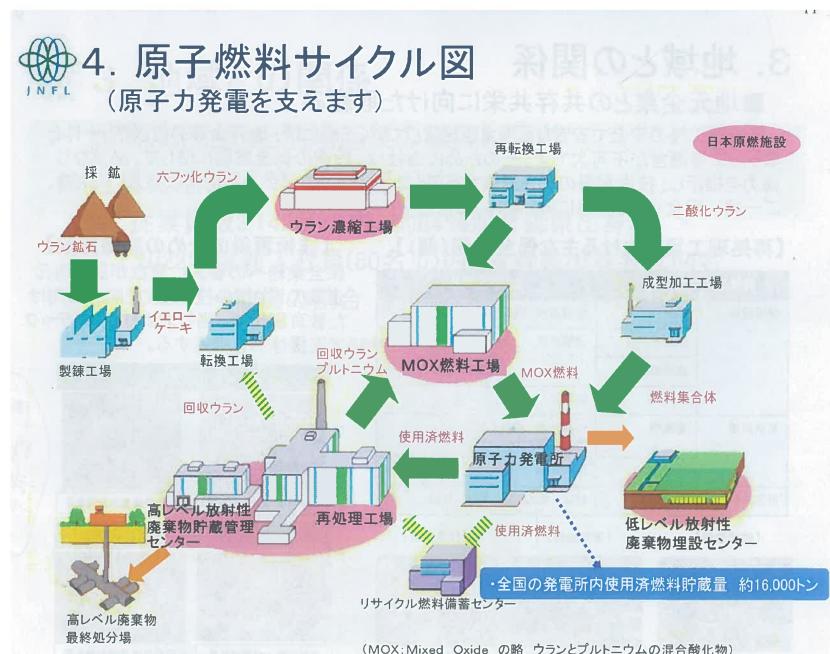
- ・社員の地元採用による雇用拡大やメンテナンス業務、予備品・資機材等の供給に

対し、地元企業への積極的発注、採用拡大を行なっており、地域の活性化と地場産業の振興に貢献している。

- ・従業員数3,142名の内、約64%が青森県出身者で、2022年度新入社員（80名）に内、64名が青森県出身者とのことである。
- ・再処理工場の安全で安定した操業を継続していくためには、地元企業と一体となった工場運営が不可欠であり、そのために日本原燃（株）では、設備の保全業務に關して、必要な技術力を提示し、技術習得の場を提供することで地元企業との共存共栄に向けた取り組みを行っている。

④ 原子燃料サイクルについて

- ・原子力発電所で使用されたウラン燃料（使用済燃料）の中には、まだ使えるウランや新たに生成されたプルトニウムがあり、これを再処理することにより繰り返し使うことができる。「原子燃料サイクル」とは、使用済燃料を再処理し、ウラン資源を再び燃料として再利用する一連の流れのことである。



各施設の概要は下記の通り。

【再処理工場】

使用済燃料の放射能を弱めるために貯蔵プールに一時冷却保存して、その後細かくせん断し、硝酸で溶かした後、再利用できるウラン、プルトニウムと再利用できない核分裂生成物（高レベル放射性廃棄物）に分離する。ウラン、プルトニウム溶液は精製、脱硝を行い製品となり、核分裂生成物を含む廃液は、ガラスと混ぜ合わ

せて溶融し、ステンレス鋼製容器に入れ、冷やし固めている。

1班約60名、5班3交替勤務、24時間体制で運転管理を行っている。

安全対策については、2重3重体制による電源確保対策や地震・津波対策など従来から取り組んでいる対策に加え、風速毎秒100mに耐えられる竜巻対策や火山噴火の降灰対策など新たな追加対策も実施し、安全性向上に全力で取り組んでいる。

【MOX燃料工場】

再処理工場で回収したウラン・プルトニウムを濃縮した後の残るウラン（劣化ウラン）と混ぜて加工し、発電所使用できるMOX燃料（ウラン・プルトニウム混合酸化物）を作る工場。現在建設中で、2024年度上期竣工予定。

【ウラン濃縮工場】

天然ウランには、燃えやすいウランの割合がわずか0.7%しかなく、このままでは原子力発電所の燃料として使用できないため遠心分離機という装置を使って3～5%まで濃縮する工場。

【高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター】

再処理工場でガラス固化体となった高レベル放射能廃棄物を最終処分までの間、30～50年専用建屋で一時冷却貯蔵を行う。

【低レベル放射能廃棄物埋設センター】

全国の原子力発電所で発生した低レベル放射性廃棄物が収容されたドラム缶を受け入れ、地下を掘り下げたコンクリートピットの中へ埋設管理している。

⑤ 再処理の意義について

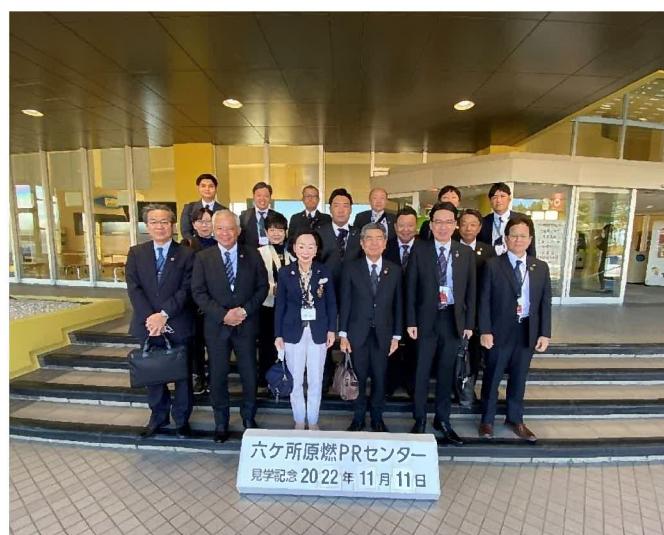
使用済燃料を再処理せずに直接処分する場合と比べて以下のことが可能となる。

- ・MOX燃料を軽水炉タイプの原子力発電所で使用することにより1～2割の資源節約効果がある。（日本のエネルギー自給率は、わずか約12%程度）
- ・高レベル放射性廃棄物の量を4分の1に低減できる。
- ・高レベル放射性廃棄物の有害度の度合いを天然ウラン並まで放射能を低減するのに必要とする期間を10万年から約8千年に短縮できる。

⑥ 核物質が平和利用のために用いられていることを確認することを目的に、国および国際原子力機関（IAEA）の査察官が24時間体制で常駐し、再処理工場内のプルトニウムが核兵器等への転用されることがないことを確認しているとの事。

2, 六ヶ所原燃 PR センター

- ・日本原燃が事業を行う再処理工場等原子燃料サイクル施設を中心に原子力や放射線等について、大きな模型やパネル、映像を使用してとても分かりやすい施設であった。



3, 原子燃料リサイクル施設

- ・施設内をバスの車窓より視察を行った。施設内では、写真が禁止のため日本原燃様のパンフレットの写真を掲載する。



ウラン濃縮工場



再処理工場



4. 事務本館での増田社長様からのご説明

・施設内の全景が見える事務本館 8F より、日本原燃株式会社の増田社長様から当該施設について詳しく、分りやすくご説明をして頂いた。また、ご説明を通して、増田社長様の青森県など地域に対する熱い思いを感じることができた。



【視察を終えて】

今回、六ヶ所原燃 PR センター、原子燃料リサイクル施設を視察して、原子燃料リサイクルに対する知見を深めることができた。昨今、ロシアのウクライナ侵攻によりエネルギー安全保障に関する懸念が世界中に広がっている。そのような中で日本のエネルギー自給率は、わずか約 12%程度と先進国の中でも極めて低い状況であり、エネルギー資源をほとんどが海外からの輸入に頼っている日本においてはエネルギーの自給率を向上させることができる、この原子燃料リサイクル技術の重要性をとても強く感じた。

また、当該施設周辺には、国家石油備蓄基地や風力発電所、太陽光発電所、研究開発施設なども集約しており、六ヶ所村周辺地域は最先端のエネルギー事業地域という印象をうけた。最後に、視察にあたり、お忙しい中ご対応頂いた日本原燃株式会社の増田社長様をはじめ関係者の皆様には、この場をお借りして御礼申し上げる。

VIII. 海上自衛隊大湊基地および航空自衛隊三沢基地 視察

【報告者：上運天 清（株式会社りゅうせきフロントライン 代表取締役社長）】

（1）海上自衛隊大湊基地視察

視察3日目、東北・北海道における自衛隊の安全保障の現状について知見を深めることを目的に青森県むつ市にある海上自衛隊大湊基地の視察を行った。

はじめに、ブリーフィングでは、大湊基地の概要や活動内容を海上自衛隊 大湊地方総監部 管理部 総務課 広報推進室長の一瀬 誠 1等海尉から説明があった。

その後、港内に護衛艦「まきなみ」と「すずなみ」が停泊していたが、「すずなみ」に乗艦し、第7護衛隊司令 藤井 健一 1等海佐、すずなみ艦長 横山 雅芳 2等海佐の案内により艦内見学を実施した。2006年に就役した「すずなみ」は、全長151m、基準排水量4650tのヘリコプター搭載型護衛艦であり、垂直式短SAM発射装置、54口径127ミリ速射砲、艦対艦ミサイル発射装置、高性能20ミリ機関砲、垂直式アスロック発射装置（VL S）、3連装短魚雷発射管などの主要武器を持つ。近年ではソマリア沖の海賊対策や、グアム周辺から沖縄南方に至る海空域で米海軍と共同巡航訓練を実施。また、ロシア連邦を訪問し、ウラジオストク港及びウラジオストク周辺海空域において実施される日露搜索・救難共同訓練に参加。さらに、アラビア海北部の海空域においてパキスタン海軍主催多国間共同訓練に参加するなど各国との共同訓練を通して平和で自由な関係強化に貢献している。

なお、「すずなみ」の艦名は“澄んで青い波”に由来しており、昭和18年就役の旧帝国海軍の駆逐艦「涼波」の名を継ぐ2代目でイメージキャラクターは、海の荒波に力強く羽ばたき、素早く獲物を狙う「はやぶさ」となっている。



（概要）

大湊基地は明治26年北の守りとして北海道室蘭に設置予定であったが視認性等、諸条件により、2年後の明治28年に自然の防波堤があり視認性や山からの湧き水で資源が多い青森県むつ市大湊に設置された。

警備区域は、津軽海峡、宗谷海峡を含む日本海側、太平洋側ともに青森県以北の周辺海域となり、任務は「防衛及び警備」「艦艇及び航空機に対する後方支援」「爆発性危険物の処理」「災害派遣及び各種救難」。防衛及び警備については、中国、ロシアからの度重なる領海侵入に対する防衛及び警備。爆発性危険物の処理については、3年前

漁獵の網に不発弾が掛かり処理をした経緯があり、災害派遣については、災害発生時の入浴支援や給水をはじめとして、最近ではコロナ禍における災害派遣もあった。これまでに東日本大震災、北海道南西沖地震、三宅島災害、有珠山噴火での活動の他に、直近では北海道知床半島沖で観光船「KAZU I (カズワン)」が沈没した事故において、第一発見の写真撮影にも関わった経緯の話があった。その他にも、下北半島には原子力施設があり、災害発生時の訓練も関係者と協力しながら対応。

護衛艦「すずなみ」では、通常第7護衛隊は、「すずなみ」「しらぬい」「ゆうだち」「まきなみ」の4隻編成で活動。5インチ砲が射程距離23Km、1分間で40発が打てる旨の主要武器説明や訓練時の対応、艦長室や艦内の装備等について説明があった。



(泉博之 海将、中村敏弘 海将補との昼食)

【視察を終えて】

大湊基地視察前の昼食時に中村 敏弘 海将補、高橋 習 1等海尉、外2名との懇親昼食会があり、事前情報や視察では聞きにくい情報交換もあったと推察する。また、昼食も大湊海自カレーを味わう事が出来た。外の景色がほとんど変わらない航海の際、隊員の曜日感覚がなくなってしまわぬよう毎週金曜日にカレーライスを食べる習慣があるとの事で、隊員のメンタル管理にも気を遣った細かさが感じられた。護衛艦「すずなみ」では、訓練での大砲発砲後の薬きょうによるデッキのキズ跡も見る事が出来、大砲発砲時の凄さを感じ取れた。また、冬季にはデッキが雪で滑りやすくなるため、海水を常時掛ける事で凍結を防いでいるとの事で海水での塩害より凍結防止を優先して運営を行っているとの事。遠洋航海時には、燃料と水がとても大切で海水でお風呂も入るとの事でした。護衛艦への乗艦は普段、経験できるものではなく、艦内の状況や武器・装備品についても初めて見るもので、予想をはるかに上回る迫力であった。現在、平和である日本において、自衛隊が日々の訓練や監視業務を遂行し、それぞれの隊員の努力があっての事と改めて感じる事ができた。今回の大湊基地視察にあたって、受け入れて頂いた大湊基地隊員の方には、この場を借りて感謝し御礼申し上げたい。

(2) 航空自衛隊三沢基地視察

視察4日目、自衛隊の同地域における安全保障の現状について知見を深めることを目的に青森県三沢市にある三沢基地の視察を行った。

はじめに第3航空団司令部 監理部長 田中誠 二等空佐からのブリーフィングがあった。

(概要)

三沢基地は、航空自衛隊唯一の日米共同使用航空作戦基地であり①地理的・能力的にも北部防衛の要石、②新たな戦力の基盤として、基地に所在する戦闘機部隊をはじめとする14個の部隊が日夜任務、訓練を実施、③平時から現場レベルでの日米の相互理解及び相互運用性向上に資する様々な取り組みを行うなど、日米の連携強化を担う重要な役割を持つ基地である。

沿革として、昭和17年三沢海軍航空隊の飛行場として開設、戦後、昭和20年米陸軍航空隊の施設部隊が移駐し、米陸軍航空隊のための飛行場として、建設工事が行われた。昭和33年北部航空方面隊司令部が発足し、基地の共同使用を開始。その後、昭和36年に米軍から航空警戒管制権の引き継ぎが行われ、昭和53年に基地業務（防空指令所）を担当し現在に至る。

滑走路は3000m。基地の総面積は1600万m²（485万坪）で嘉手納に次ぐ広さとなっており、米軍利用が66%、日米合同利用が32%、日本利用が2%である。航空機の種類について、航空自衛隊で戦闘機（F-35A）30機、早期警戒機（E-2D/E-2C）3機、情報収集機（RQ-4Bグローバルホーク）1機、その他、輸送ヘリCH-47J、中等練習機T-4が常駐。米軍で、戦闘機（F-16）、輸送機（C-12）、哨戒機（P-8）が常駐。

三沢基地での緊急（スクランブル）発進は、過去10年の平均値で国全体の24%あるが昨年は16%（70/446回）と過去10年で最も低い。

尚、三沢基地は、軍民共同空港でもあり、三沢空港としても活用されている。

(質疑応答)

Q：日本利用の2%は、何に活用しているのか。

A：事務所や倉庫。

Q：共同利用のメリットとデメリットは。

A：建物がなかなか建てられない等のデメリットはあるが、メリットは沢山ある。
メリットの方が多い。

Q：米軍側にも自衛隊は入れるのか。

A：普通に入る。

Q：米軍嘉手納基地は、民間との共同利用や自衛隊との共同利用について、どちらが良いと考えるか。

A：個人的には、別々が良いと考える。

Q：防空管理体制はどうなっているのか。

A：航空自衛隊千歳基地含め管制は自空で行っている。

Q：民との共同利用で民間航空機が入って来るが、課題はあるか。

A：出入りゲートがしっかり分かれているので、特に課題はない。

Q：ロシアのウクライナ侵攻後に、防衛及び警備に変化はあるか。

A：顕著な動きはないが深く話せない。

Q：日米共同利用で課題はあるか。

A：犯罪時の対応は感情が入ってくるのでコメントは差し控えるが、大きな課題はないと考える。

Q：米軍には、どういった施設があるのか。

A：基地内に住居もあるが、基地外に住んでいる方もいる。また、米軍家族用の小・中・高・大の学校もある。

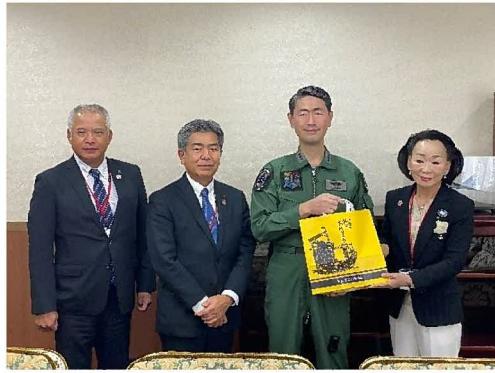
Q：米軍人は何人いるか。

A：基地内で3,000人、基地の外にも1,000人程度。自衛隊の隊員は3,000人程度。

その他、多数の質問があったが、丁寧に回答して頂いた。



(大嶋善勝 空将補への表敬訪問)



(安藤忠司 空将への表敬訪問)

ブリーフィング後、タンダ隊員の案内により F – 3 5 戦闘機の見学を実施した。
(概要)

F – 3 5 Aは、F – 4 戦闘機の後継として導入された最新鋭の主力戦闘機で、2017年から三沢基地に配備。F – 3 5 Aは、高いステルス性能のほか、これまでの戦闘機から格段に進化したシステムを装備。乗員 1人で全幅 10.7m、全長 15.6m、全高 4.4m、最大速度マッハ約 1.6、航続距離約 2,200Km。武装として、25mm 機関砲、空対空レーダーミサイル、空対空赤外線ミサイル等がある。

【視察を終えて】

三沢基地は自衛隊、米軍、民間の共同利用空港として沖縄の抱える課題解決の糸口があるのでなかと興味深く視察に臨んだ。やはり、参加者も同様な方が多かったのかブリーフィングでは、かなり多くの質問が出て時間切れの状態になった。沖縄での制空権問題や米軍と自衛隊との共同利用。米軍と民間との共同利用、或いは三沢基地同様、自・民・米の共同利用含め、今後の沖縄を考える良い機会になった。また、戦闘機 F – 3 5 の視察では、戦闘機の特徴をはじめ、弾薬格納庫の中まで説明頂き、通常聞く事の出来ない詳細な説明があった。

今回の大湊基地視察にあたって、受け入れて頂いた三沢基地隊員の方々には、この場を借りて感謝し御礼申し上げたい。



IX. 星野リゾート青森屋 観察

【報告者：前田 貴子（株式会社ゆがふホールディングス 代表取締役社長）】

「星野リゾート 青森屋」は約 22 万坪の敷地を持ち、「のれそれ青森～ひとものがたり～」（のれそれ＝津軽弁で目一杯の意味）をコンセプトにした、青森文化を丸ごと体験できる温泉旅館である。

青森屋の前身は「古牧グランドホテル」で、渋沢栄一の書生を務めた人物が創業した。かつては皇室も訪れたほどの大規模な名門旅館であったが 2004 年に経営破綻。2005 年、当時施設を所有していたゴールドマン・サックス社から星野リゾートが運営を受託した。

星野リゾートの再生手法として、社員の主体性を引き出す意識改革やユニット制の組織改革、徹底した顧客満足度の追求、現場主導でその地域らしさや地域の魅力をサービスに反映させることができている。青森屋でも「魅力会議」を通して従業員自ら「のれそれ青森」というコンセプトを打ち出し、青森の魅力を余す所なく発信する姿勢が顧客に評価され、破綻から 5 年で黒字転換に成功した。

青森屋の再生過程については、「トップも知らない星野リゾート」(2018,PHP 研究所) や「星野リゾートの教科書」(2010,日経 B P 社)、「星野リゾートの事件簿」(2009,日経 B P 社) に詳しい。ちなみに、これらの書籍に登場する、青森屋を再生した当時の総支配人・佐藤大介氏は現在、沖縄県北部においてテーマパーク建設プロジェクトを手掛ける（株）ジャパンエンターテイメントの取締役である。

さて、当観察団が滞在したのは週末の金曜日であったが、チェックインカウンターはたいへんな賑わいで、コロナ禍前並みの高稼働だったのではないかと推測される。短い滞在時間ではあったが、可能な限り館内を探索・体験して得た気付きを、当レポートで共有する。

■館内施設、アクティビティ

館内では各所に、いわゆる「インスタ映え」するスポットがあり、「りんご灯籠回廊」などは宿泊客から思わず感嘆の声が上がるほど美しく、何処を切り取っても絵になる演出が工夫されている。青森文化の体験基地らしく、青森の方言がサービス名や施設名、サイン類にふんだんに使われており、旅情を盛り上げてくれる。

「じゃわめぐ広場」では生のリンゴがカプセルに入っている「りんごガチャガチャ」や「ほたて釣り」「リンゴジュースが出てくる蛇口」など、年齢を問わず楽しめるアクティビティも用意されている。

温泉は館内にある「浮湯」を利用した。露天風呂となっており、紅葉とライトアップを楽しみながら、とろみのある湯を満喫できる。

今回は体験できなかったが、早朝の「津軽弁ラジオ体操」や、離れでの工房体験、紅葉りんご馬車での馬とのふれあいなど、次の機会にはぜひとも、ゆっくり滞在して体験したい。



りんご灯籠回廊



映える撮影スポット



りんごジュースが出る蛇口



りんごがチャガチャ

■ 「みちのく祭りや」のショータイム

青森の四大祭り（青森ねぶた祭、八戸三社大祭、五所川原立佞武多、弘前ねぷたまつり）を一度に楽しめる圧巻のショー。以前はショーレストランとして、レストラン利用者のみに提供されていたが、より多くのゲストに青森の四大祭りを楽しんでもらおうと大型リニューアルを行い、2022年4月にショースペースとして生まれ変わった。

出演者は、ストーリーテラーや祭りばやし、山車運行、跳人など、プロの津軽三味線地謡と歌手をのぞき、全て青森屋のスタッフが担う。日中はフロントやレストランなどの現場でサービスをしていたスタッフ達が、夜はショーの出演者として登場し、プロ並みのパフォーマンスを披露するのである。ショーの最後には観客も舞台にあがり、演者たちと一緒に「ラッセーラー」の掛け声で跳人体験を楽しめる。



ステージいっぱいに広がる山車



観客も跳人体験できる

■食事

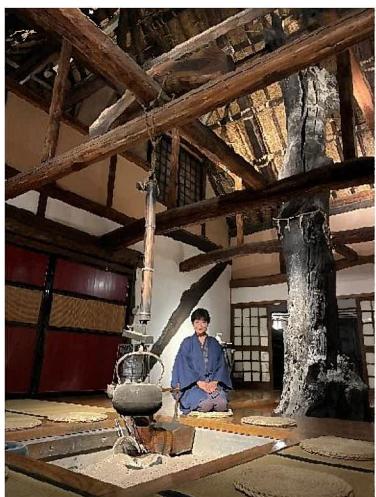
夕食は「南部曲屋」で、郷土料理や地元食材をふんだんに使った和食のフルコースを堪能した。南部曲屋は、「曲屋」という馬と一緒に生活する雪国らしさの詰まった造りを活用し、建物そのものに青森を感じてもらえるようにしているとのこと。

朝食は「のれそれ食堂」でバイキング形式。宿泊客はあらかじめ時間帯を予約しているため、多少のウェイティングはあるものの、混雑感はなくスムーズに流れている印象。

特筆すべきは、目玉メニューである「かっちゃん（お母さん）」が割烹着姿で提供する目前料理（ホタテの味噌焼き）と、「うめじゃ丼」という新鮮な海の幸を自分で盛り付けて食べる海鮮丼。イクラやホタテ、マグロ、甘えびなどを好きなだけのっけて、何度も食べられるという贅沢な一品だ。同業者としてはその原価率が気になるところだが、顧客満足度が抜群に高い上に、オペレーションの負荷は少ない提供方法で、よく練られた効率の良いサービスであると感心した。



うめじゃ丼。新鮮な海鮮を好きなだけのっけて食べる



南部曲屋の囲炉裏端



滋味深い七子八珍盛り合わせ

■新型コロナ感染防止対策やプラスチックごみ削減への取り組み

レストランのビュッフェボードやトングなど、複数の人が触れるものにはウイルスを無効化するメディカルナノコーティングが施されているため、利用客は料理台でのマスク着用協力は求められるが、手袋の着用は「任意」となっており、素手でトングを使っても構わない。ウィズコロナ時代のバイキング形式の提供方法も、どんどん変化していると実感した。

プラスチックごみ削減に向けた活動としては、2019年からアメニティのポンプボトル化、歯ブラシのリサイクルを行っているとのこと。歯ブラシなどのアメニティを必要とする宿泊客は、「じゃわめぐ広場」にある「もってってけろ」カウンターで必要なものを自分で調達する。

また、「ペットボトルフリー活動」として、客室でのペットボトル入りミネラルウォーターの提供をやめ、代わりに全客室に容量1リットルのウォータージャグを設置し、パブリックスペースにあるウォーターサーバーで、24時間いつでも給水できるようにしている。この活動は、青森屋（全236室）と奥入瀬溪流ホテル（全187室：星野リゾート）の2施設で取り組むことで、年間約30万本のペットボトルごみを削減できる見込みとのこと。



客室にセットされている「ペットボトルフリーへの取り組み」

【視察を終えて】

非常に短い時間の滞在であったが、「青森感」を満喫することが出来た。

「その土地らしさ」を感じることは旅人が求める価値である。その価値を沖縄に置き換えたときに、青森屋が追求している顧客満足と生産性を両立させる経営手法は、非常に参考になると思った。次回訪れるときは、青森屋に2泊、奥入瀬渓流ホテルに2泊しようと決意して宿を後にした。（文責：観光委員長 前田貴子）



囲炉裏ラウンジ



巨大りんご



敷地内公園の足湯



公園内のあおもり工房、八幡馬ラウンジ

【参考文献】

「トップも知らない星野リゾート」(2018,PHP研究所)

「星野リゾートの教科書 サービスと利益 両立の法則」(2010,日経BP社)

「星野リゾートの事件簿 なぜ、お客様はもう一度来てくれたのか?」(2009,日経BP社)

星野リゾート公式ホームページ <https://www.hoshinoresorts.com/>

X. 毛越寺および中尊寺 視察

【報告者：仲宗根 齊（株式会社沖電工 代表取締役社長）】

4日目は、午前中に航空自衛隊三沢基地を訪問、担当から基地の現状についての説明を受けた後移動し、F-35A 見学と同機についての説明を受ける。三沢基地を後にし、新幹線「はやぶさ」「やまびこ」を乗り継ぎ八戸から一ノ関へ、そこで昼食を取るが昼食会場が「蔵元レストラン 世嬉の一」と蔵元だけあり、全国鑑評会で金賞を受賞したお酒等も振舞われ、それを少々頂き、午後の行程である「毛越寺（もうつうじ）」「中尊寺」へ向かった。

まずは毛越寺に、ここ毛越寺は国の特別史跡・特別名勝の二重指定地で2011年には中尊寺を含み「平泉-仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」として世界文化遺産に登録された。毛越寺は創建時の伽藍（がらん：大きな寺や寺院の建物）は残念ながら焼失したが、当時の堂宇・廻廊の基壇・礎石、土壘などが遺され当時の伽藍様式を知るうえで貴重な遺構として保存されている。また「大泉が池」を中心とする浄土庭園は日本最古の作庭書「作庭記」の思想や技法を今日に伝える池庭となっており、紅葉の美しさも相まって、創建当時の毛越寺をイメージするには十分に迫力のある風景であった。

毛越寺は、寺伝によると850年、天台宗の高僧、慈覚大師が創建した一宇の堂「嘉祥寺」が起りと伝えられており、1100年代奥州藤原氏の二代基衡（もとひら）から三代秀衡（ひでひら）の時代に多くの伽藍が作られその規模は中尊寺をしのぐほどであったと伝えられている。



毛越寺では、まず本堂で住職から毛越寺の名の由来や歴史について説明があり、続いて参加者一人ひとり、住職の読経の中、本尊薬師如来に手を合わせ、身体健康・災消除を祈願した。その後境内を散策すると、松尾芭蕉の句碑「夏草や 兵どもが 夢の跡」が目に

入った、その句は芭蕉が当地を訪れた際、悲運の武将源義経をしのび詠んだ句で、現在NHKで放映中の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の源義経が思い出され、京を追われ再びこの平泉に身を寄せていた義経もこの風景を見ていたのかなと不思議な思いがした。



続いて中尊寺へ、この寺も毛越寺と同時期に慈覚大師が開山したと伝えられている。1100年代初めに奥州藤原氏初代清衡（きよひら）により、1000年代後半に東北地方で続いた戦乱（前九年、後三年合戦）で亡くなった人々を平等に供養し、仏国土（仏の教えによる平和な理想社会）を築くべく、大規模な堂塔の造営が始まり、それは二代基衡、三代秀衡と引き継がれ、その規模は寺塔40余宇、禅坊300余宇にも及んだと言われていたが、1337年の火災で惜しいことに多くの堂塔や宝物が焼失してしまった。しかし国宝建造物第1号の金色堂をはじめ、国宝の中尊寺經など一部の宝物は現在まで良好に伝えられており、東日本随一の平安佛教美術の宝庫と称されている。堂宇全体を金箔で覆われた金色堂はその名の通り眩いばかりの金色で目を見張る堂宇であった。ちなみにガイドから、昭和の解体修理時には欄干に沖縄の夜光貝が使用されたとの説明があり、すこしづか親近感を感じた。また、宝物館「讚衡蔵（さんこうぞう）」で見た中尊寺經は紺色の紙に金泥や銀泥で書写された経典で、非常に美しく、これ



が1000年余の物かと驚いた。

毛越寺、中尊寺と駆け足ではあったが、当時の建築、絵画、書跡、工芸、彫刻などを感じることができる良い視察となった。最後に、中尊寺視察後半のなだらかな下り坂は運動不足の身には少々きつかったことを記しておく。

XI. 青森県、宮城県観光地視察

【報告者：比嘉 為俊（沖縄経済同友会 事務局研究員）】

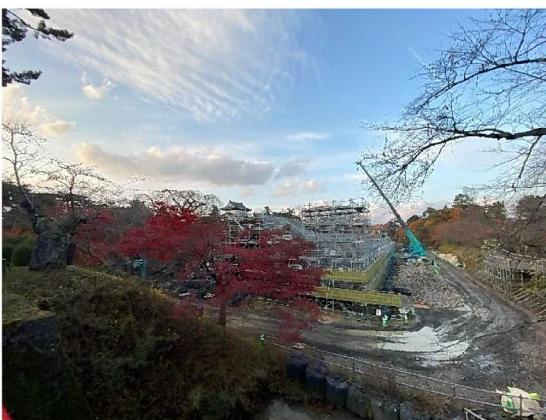
各県の歴史文化について、知見を深めることを目的に、青森県では「弘前城」、宮城県では「ニッカウヰスキー宮城峡蒸溜所」の視察を行った。

1. 弘前城

弘前城は、現存する 12 天守のうち東北地方唯一の城で、400 年の歴史を誇る。弘前藩を創立した津軽為信（つがるためのぶ）が築城を計画し、その息子の津軽信牧（つがのぶひら）が慶長 16 年（1611 年）に完成させ、江戸時代を通じて弘前藩津軽氏の居城となった。城郭は本丸、二の丸、三の丸、四の丸、北の郭、西の郭の 6 つで構成された平山城で、天守は 3 重 3 階。弘前城はこれら城郭の縄張りが当時のまま残っている、大変珍しい城としても有名である。今では天守と 3 棟の櫓と 5 棟の城門が現存し、国の重要文化財に指定されている。現在の天守は 3 重だが、津軽信牧が築城した当時は 5 層の大きな天守だった。



弘前城本丸東面の石垣には、以前から膨らみが確認されており、崩落する危険性から、約 100 年ぶりに石垣を修理することになり、平成 27 年 7 月～9 月にかけて、天守を約 70m 本丸の内側へと曳屋する工事を実施。石垣修理工事には約 10 年間を要し、曳屋した天守を元の位置に戻すまでにも約 6 年かかると見込まれている。



11 月上旬に訪れた際は、イチョウやカエデの樹など紅葉で弘前城が色鮮やかな秋の装いに包まれ、沖縄では観ることができない景色に風情を感じることができた。

なお、毎年 10 月末～11 月にかけて「弘前城菊と紅葉まつり」を開催しており、1000 本の楓、2600 本の桜が一気に色づく様子は圧巻であり、夜には公園の一部がライトアップされ、夜空にひと際映える紅葉を眺めることができる。

また、弘前城は日本三大桜の名所として有名であり、ソメイヨシノを中心に、シダレザクラ、八重桜など、52 種類、約 2,600 本の桜が咲き誇り、桜の絶景を創り出す。是非、桜が

開花するシーズンに訪れてみたいものだ。



2. ニッカウヰスキー宮城峡蒸溜所

朝ドラ「マッサン」でも話題になったニッカウヰスキー。創業者の竹鶴政孝氏は1934年に、北海道余市でウイスキーブルーリーを始め、第二の蒸溜所として1969年に建設されたのが、宮城峡蒸溜所である。



ビジターセンターでは、ウイスキーの製法や酒類、宮城峡蒸溜所の特徴、ニッカウヰスキーの歴史、創業者の竹鶴政孝氏のウイスキーブルーリーへの想いなどを、映像やパネル、展示物で紹介している。蒸留所見学を通してニッカウヰスキーの魅力を伝え、ウイスキーの製造過程とブランドへの理解を深めることができた。



約18万m²の敷地内に立ち並んでいる25棟の貯蔵庫の中には、蒸留後に詰められたウイスキー樽が並んでおり、長い年月をかけて熟成される様子が窺い知れる。



テイスティングバーでは、蒸留所でしか飲むことができない貴重なウイスキーを飲むことができ、参加者各々が好みのウイスキーを注文し、その味を楽しんでいた。

その隣では販売用のウイスキーショップにもバラエティに富んだ関連商品が並んでおり、レジ前には試飲後に好みのウイスキーをお土産用に購入する人で長い列ができておらず、ウイスキーの人気を窺い知ることができた。

